

以上で舌骨と氣管に關する筋は終つたが、尙ほ頸部の筋として斜角筋、肩隅舉筋、長頸筋等がある。

斜角筋は上部頸椎の横突起より起り第一肋骨及び鎖骨の後部に附着する。働きは呼吸を助ける。

肩隅舉筋も亦上部頸椎の横突起より起り肩隅を舉げ呼吸を助ける。

長頸筋は後頭骨より起り第六頸椎の横突起に附く。働きは頸の廻轉を助ける。

第一百十圖は胸骨舌骨筋以下諸筋を示す。

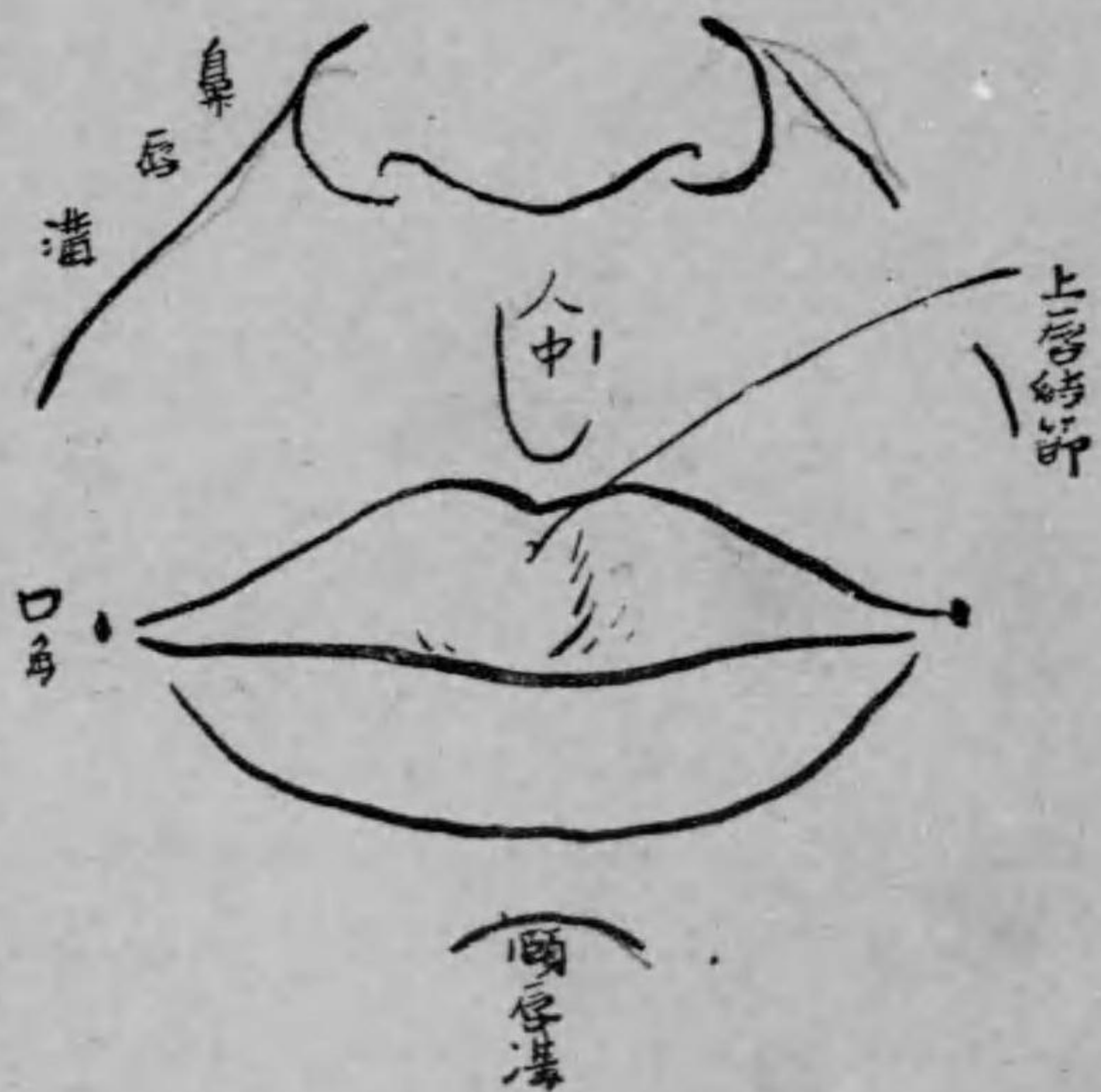
第一百十一圖は頸の切斷面を示す。

第十五節 顔面筋

顔面の筋は耳、目、口、及び鼻の四管を働かしむる機械的の動作をなすと同時に、喜怒哀樂等の表情をもなす筋である。而して此處には便宜上口の筋から説明する。



第一百十二圖



口の筋を學ぶに先立ち、先づ口の各部の名稱を記憶して置かなければならぬ。

口は外部から見ると第一百十二圖に示す如き形狀をなし、其の各部には圖に示す如く人中、上唇結節、口角、頤唇溝、鼻唇溝等の名稱が附されて居る。

口に屬する筋は大別して咀嚼筋と口裂筋とに分たれる。

咀嚼筋には咬筋、顛顛筋、内翼状筋及び外翼状筋がある。

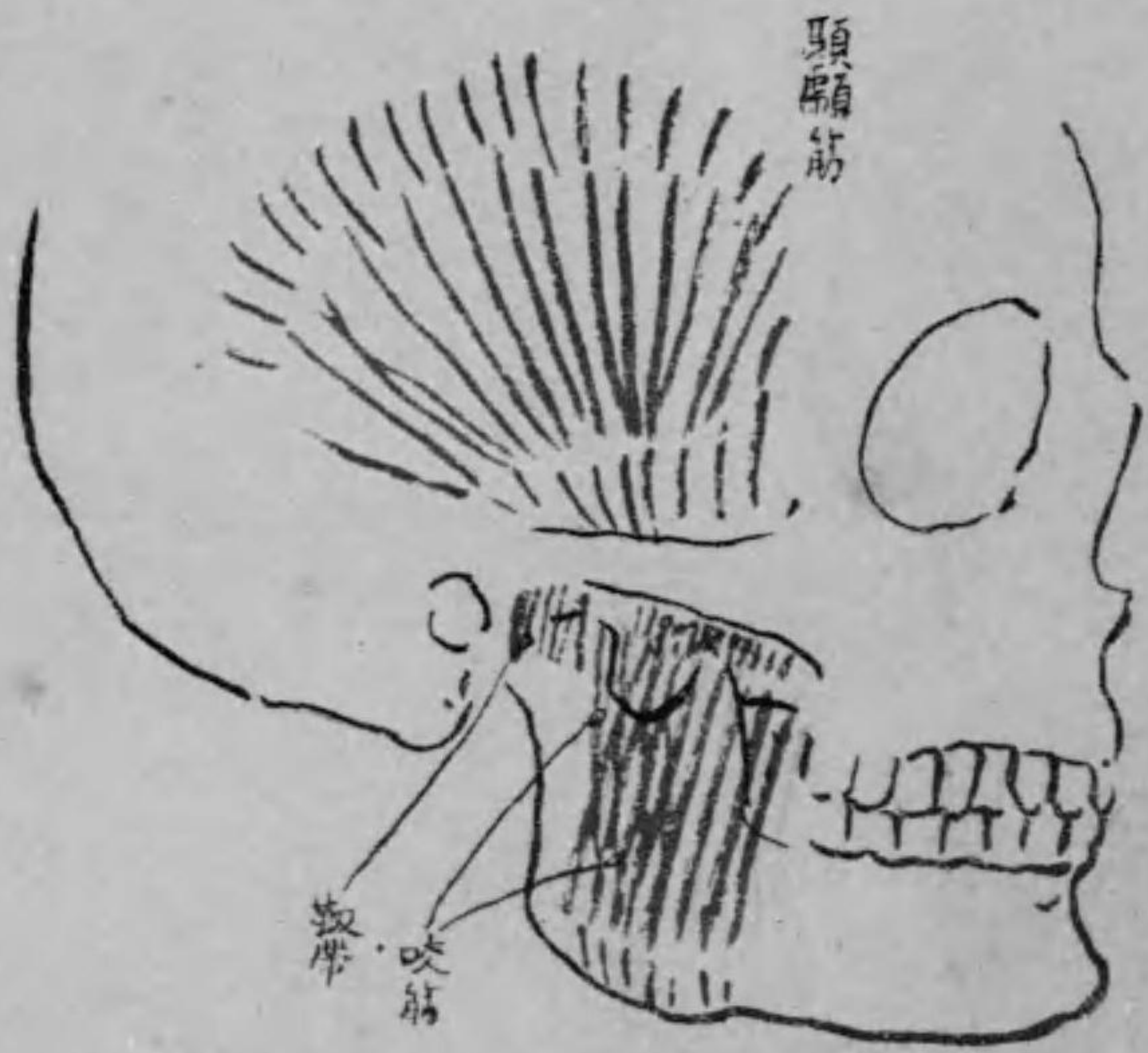
○咬筋は頤骨及び額弓(額橋)の下縁より起り斜に後下方に走り下顎骨の外面下顎角の部に附着する。此の筋は浅深二層に分れ相互に少しく交叉する。働きは機械的には開いた口を閉じ、表情的には全身の力を籠めて事をなす場合に堅く口を閉じ歯を喰ひしぼる働きをなす。此處に於て咬筋の隆起は外に現はれる。

○顛顛筋は顛頂骨の顛顛窩より起り、其の纖維は集合して鳥啄突起に附着する。働きは咬筋と同じ。而して物を咬む場合に外部に其の運動を現はすが、老人及び瘦せた人に於て最もそれが甚だしい。物を喰ふ時、俗に云ふこめかみの部分の動くのは即ち此の筋の働きである。

○内翼状筋は外翼状筋と共に蝴蝶骨の下部翼状突起より起り、外翼状筋は下顎關節突起の頸部に附着し、内翼状筋は下顎骨の内面に附着する。此の二筋は共に内方にあつて少しも外部に現はれない。併し働きは顯著で下顎を上顎へ近づけるのみではなく之れを前に押し出す。咀嚼運動に必要である。

第百十三圖は咬筋及び顛顛筋を示す。

第百十三圖





第百十四圖は内翼状筋及び外翼状筋を示す。圖は下顎骨を内から覗いて見た場合である。

以上に述べた四筋は皆な下顎を上方へ牽く運動、即ち口を閉ぢる運動をなすが、元來口の開閉は、肩胛舌骨筋、胸骨舌骨筋等によつて先づ舌骨を固定せしめ、然る後に下顎二腹筋、莖状舌骨筋、顎舌骨筋等によつて之れを下方へ牽くのである。

次に口裂筋は三層よりなり、其の第一層には口輪匝筋、大頰骨筋、上唇方形筋、笑筋及び三角頰筋等がある。

口輪匝筋



口輪匝筋は口の周圍を取り巻く筋束で、周圍の筋より起り別の起點と附着點とを有せず、一部は鼻中隔と合す。働きは内側部が働けば口を軽く閉ぢ、周圍の部分が働けば口を強く閉ぢ、且つ口を前方に突出する。其の際口裂は圓くなり、其の周圍には數多の皺を作る。

第百十五圖は口輪匝筋

を示す。

の大顎骨筋は顴骨の前面より起り口角に停止する。働きは口角を上後方に牽引

する。此の筋が収縮すれば

口角を外上方に轉じ、其

の上部は少しく凸出する

其の時第百十六圖に示す

如く外眥には二三の皺が

作られ喜悅の相をなす

◎上唇方形筋は内眥、下眼

窩縁及び顴骨の三頭より

起り、鼻翼及び上唇に停止

する。働きは鼻翼及び上

第百十六圖 喜悅の相



唇を上擧する。而して此の筋の顴骨頭は大顎骨筋の隣りにあるが其の反對の表情をなす。即ち鼻唇溝の中央部を引き上げ憂愁の情を表はす。又下眼窩縁頭は

上唇を引き上げ口角の位置は變せないが口裂を上方に向つて屈折し口をへの字形となし、鼻唇溝の中央を上方に轉じ、不満啼泣の情を表はす。

笑筋は微細の筋で口角より起り、外方に向つて走り、頬の皮に附着する。働きは

口角を後方に牽き頬の皮

に小窩を作る。此の小窩

を俗に笑窪と云ふ。笑筋

は笑ひの表情筋である。

三角顴筋は薄い三角形

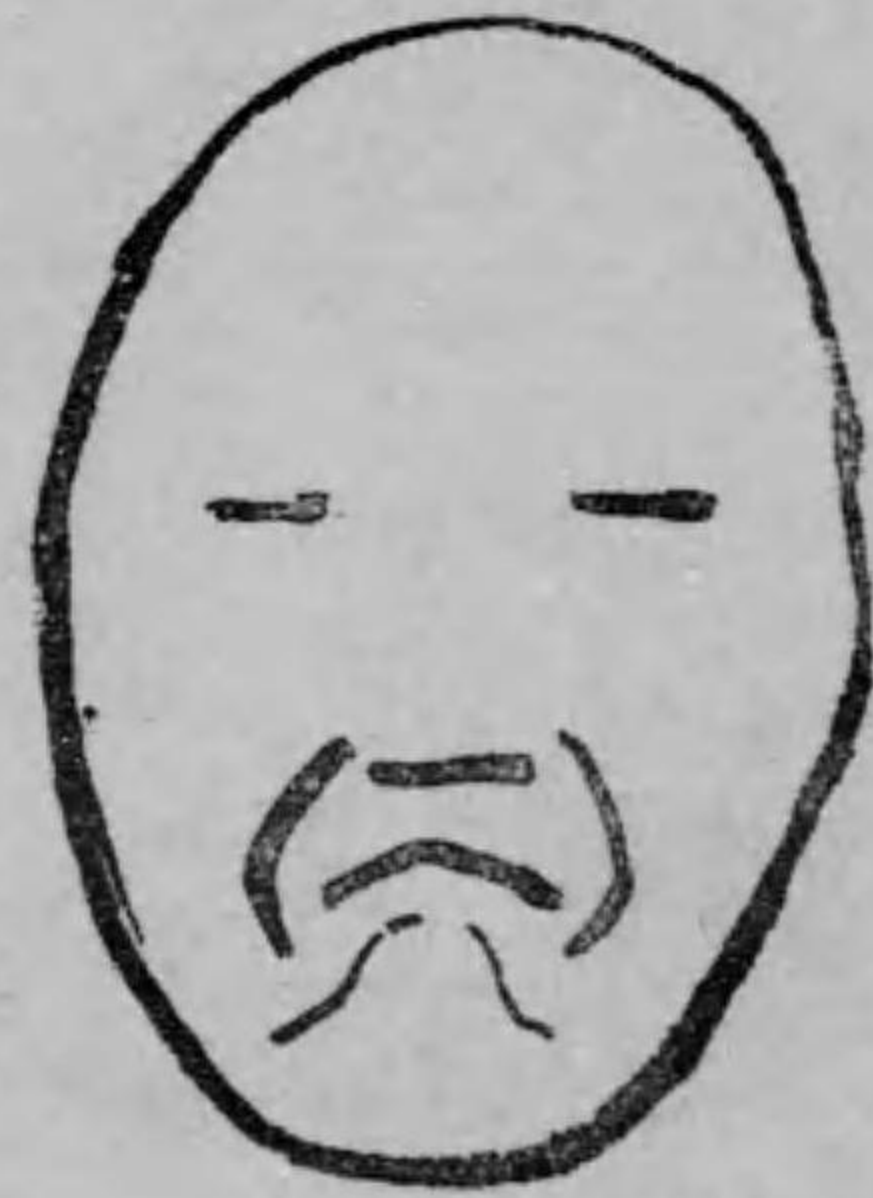
の筋で、其の纖維は下顎骨

底に起り、口角に至つて停

止する。働きは口角を下

擧する。尚ほ又鼻唇溝の

第百十七圖 不満の表情



下端を内方に牽いて憂愁の情をなし、一層強ければ不満或は輕蔑の意を表はす。第百十七圖は此の表情を示す。

口裂筋の第二層には犬齒筋及び方形頤筋がある。
犬齒筋は上顎骨の犬齒窩の邊より起り口角に停止する。働きは口角を上掣する。

方形頤筋は下顎骨の頤部に起り下唇に停止する。働きは下唇を下掣し且つ之れを多少屈曲せしめ、煩悶の情を表はす。

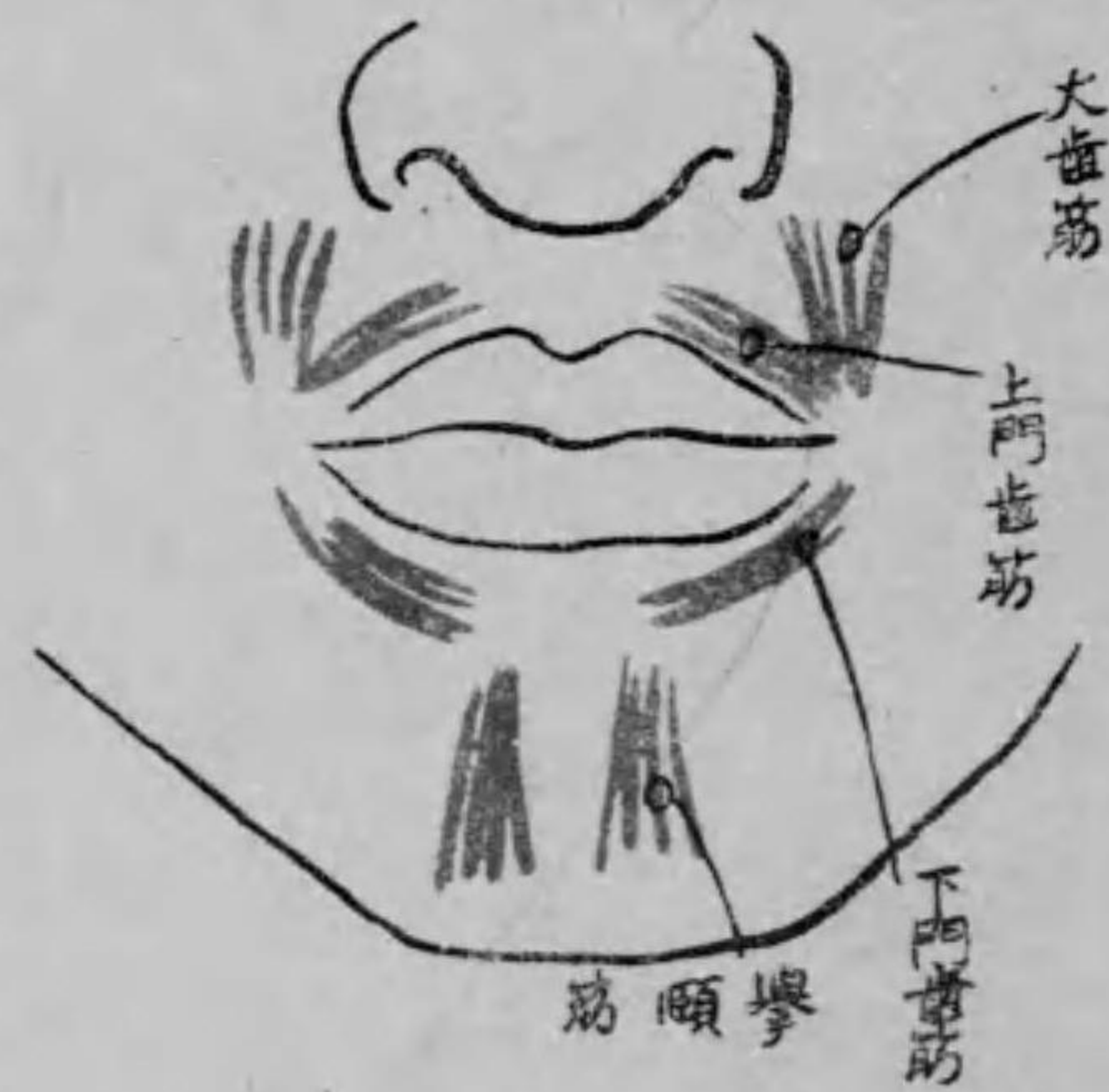
口裂筋の第三層には頰筋、舉頤筋、及び上下門齒筋がある。

頰筋は大臼齒の邊より起り其の纖維は口角に向つて集中し後口輪匝筋に合す。頰を構成する大部分である。働きは頰部を齒槽に向つて壓迫し口裂の開閉をなす。齒列より頰に食み出したものを再び齒列の中に返す働き、及び多量の空氣を一時に口腔より押し出す如きは此の筋の働きである。

舉頤筋は齒槽突起より起り下内方に走り顎の皮膚に附く。働きは顎の外皮を上掣し小窩を表はす。

上下門齒筋は上下唇の門齒のところより起り口角に向ふ。唇を反轉せしめる。第百十八圖は口裂筋の深層諸筋を示す。

第百十八圖
口裂筋深層



鼻

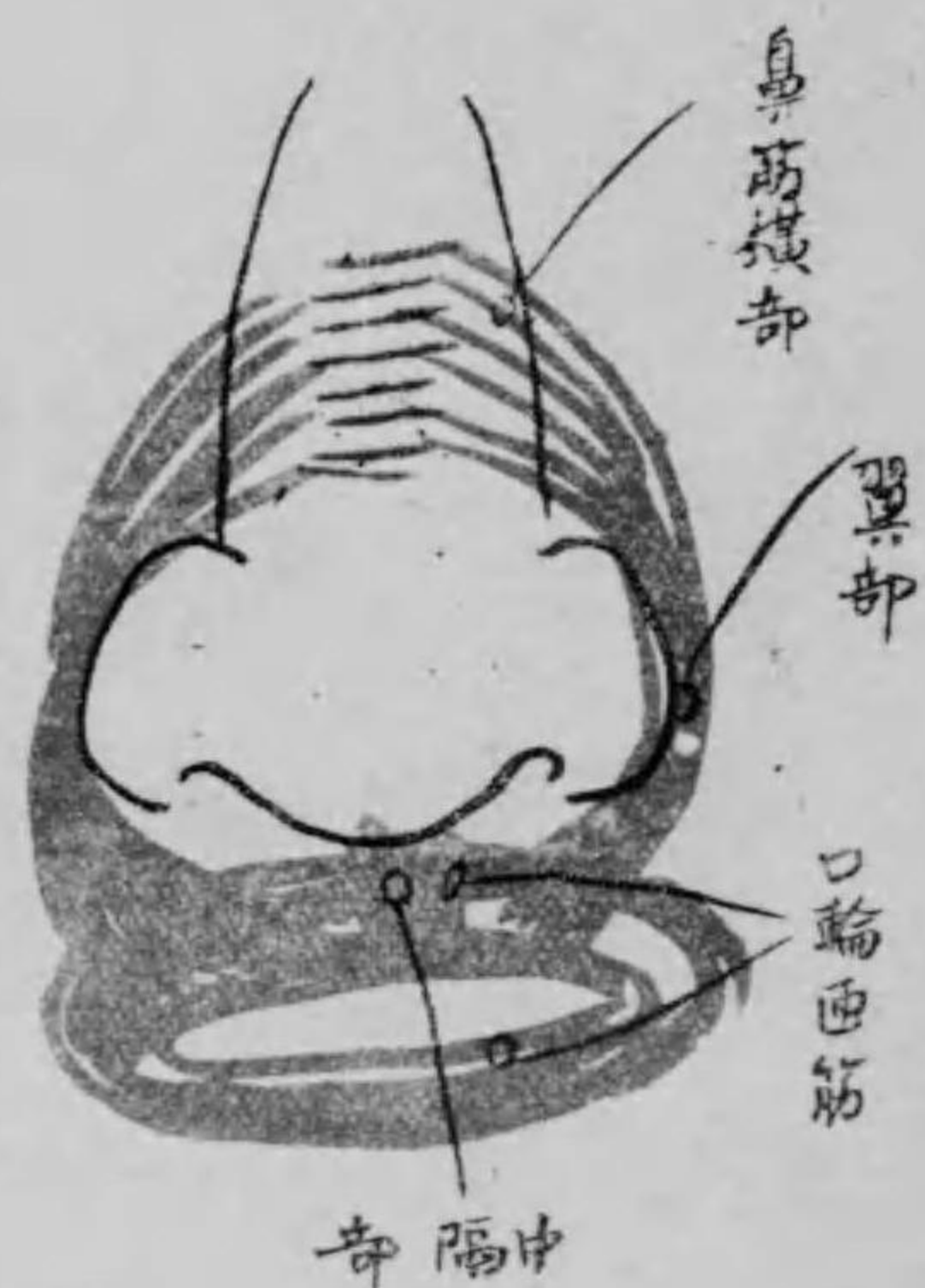
鼻の筋を學ぶに先立ち、先づ鼻の各部の名稱を記憶しなればならぬ。鼻の概形は第百十九圖の如き形狀をなし、其の各部には圖に示す如き名稱が附されて居る。而して鼻は其の大部分軟骨から成り立ち、第百二十圖は之れを示す。鼻の美は古來鼻根の窪まないのを可しとされて居る。世に希臘鼻と稱されるものは即ち之れである。又鼻骨と軟骨との織ぎ目の著しいものを段鼻と稱し、之れは義人の鼻とせられる。其他形狀によつて團子鼻、獅子鼻、あぐら鼻等の名稱がある。

第百九十九圖 第百二十圖



鼻の筋には鼻隆筋及び鼻筋がある。
 鼻隆筋は鼻背に起り上方に走り額の皮膚に終る。働きは鼻を引き上げ、眉間を引き下げ、鼻に皺を作る。鼻筋は數部に分たれるが、藝術解剖ではそれ程複雑に考へる必要はない。唯だ働き方によつて三つに分てばよい。即ち横部、翼部、及び中隔部がそれである。此の三部は共に上顎骨の門齒犬齒間の齒槽突起邊より起り、横部は鼻背に向つて放散し、翼部は鼻翼に向つて走り、中隔部は鼻中隔に向ふ。働きは翼部と

第百二十一圖

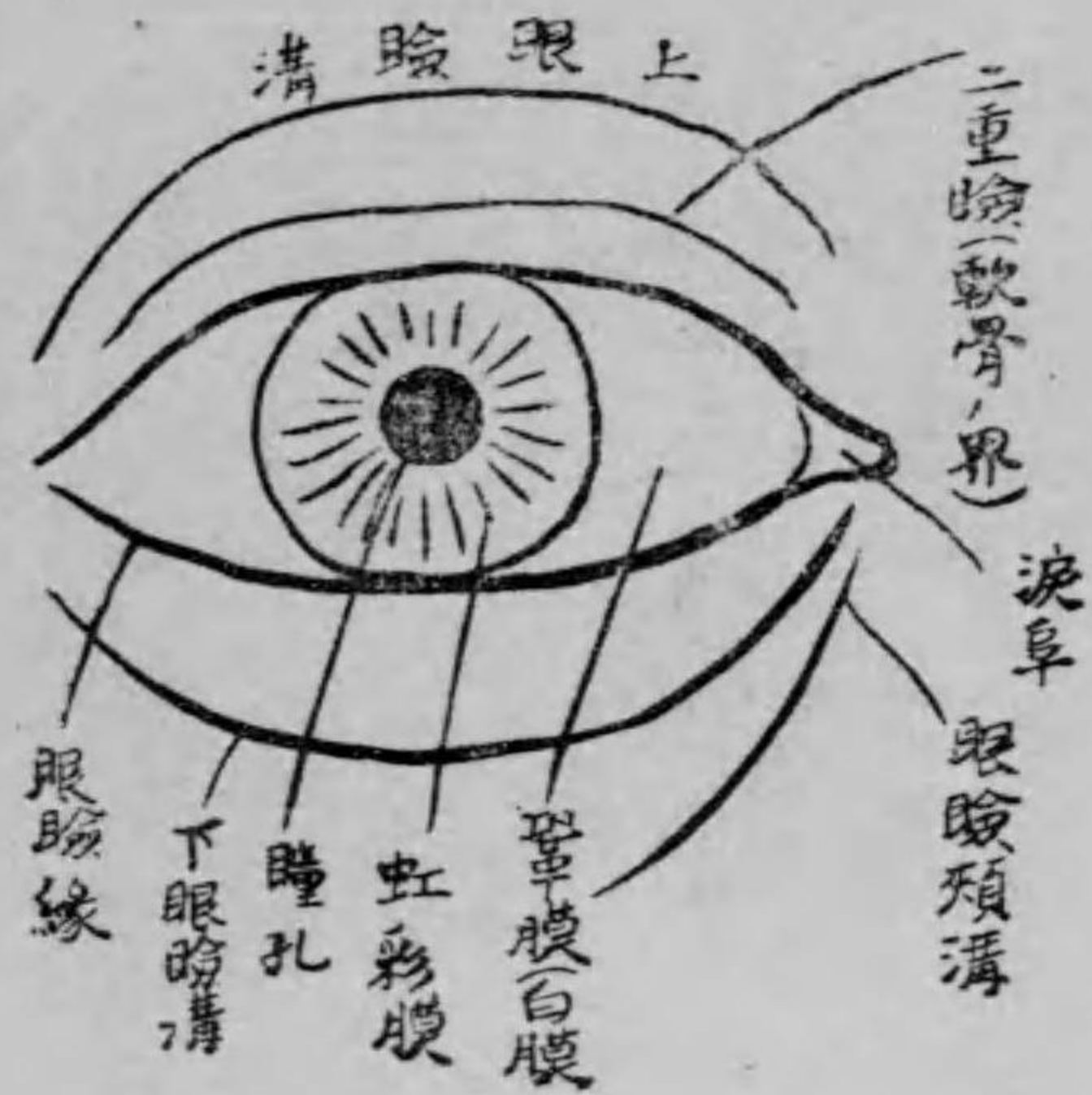


眼の大体の形は第百二十二圖に示す如き形狀をなし、其の各部には圖に示す如く、瞳孔(黒眼の部分)、虹彩膜(茶眼の部分)、鞏膜(白眼の部分)、涙阜、上眼瞼、下眼瞼、上眼瞼

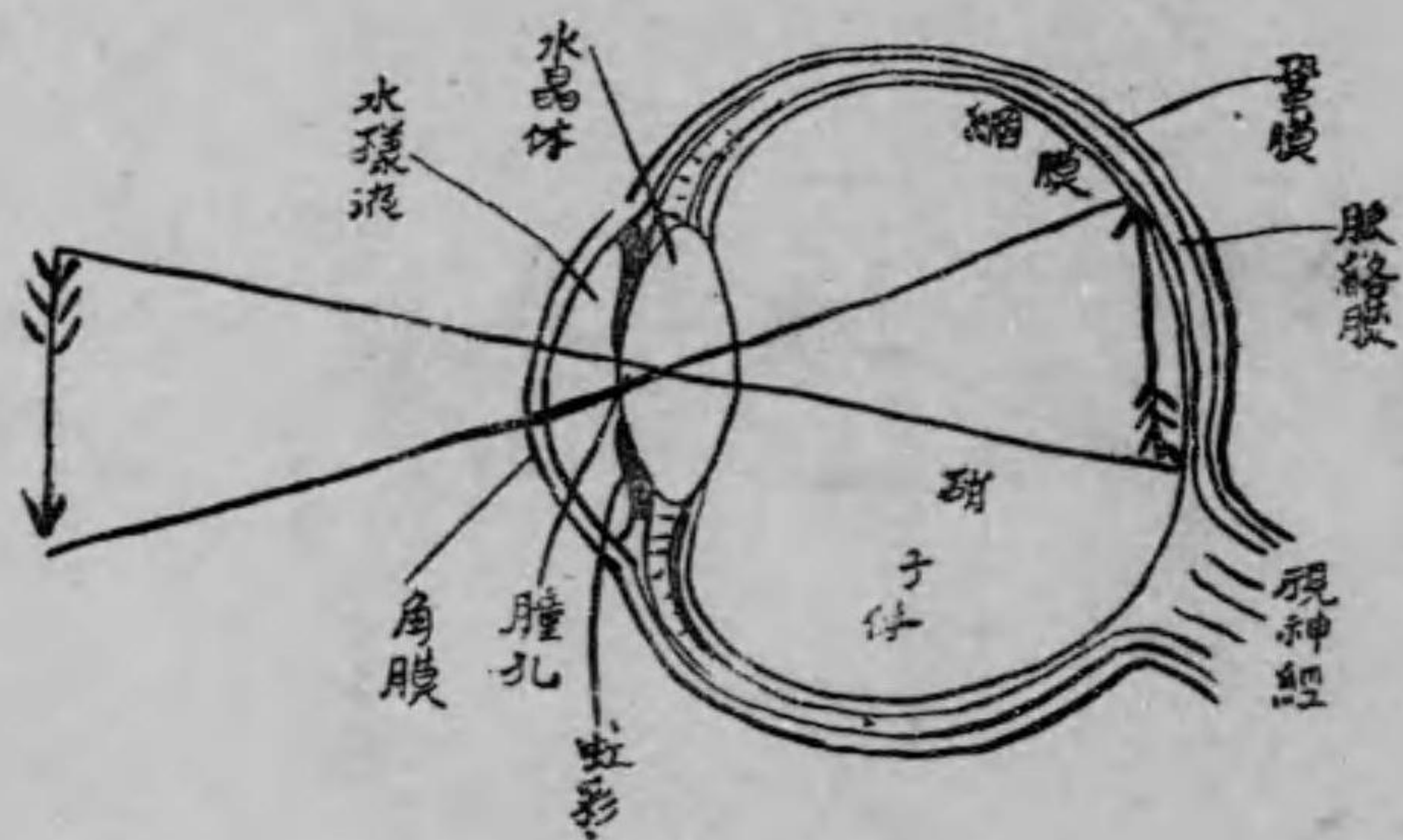
中隔部は鼻を引き下げて鼻孔を細長くし、横部は其の反對の働きをする。又三部同時に働けば鼻孔を大きくする。

第百二十一圖は鼻筋を示す。

眼を學ぶに先立ち、先づ外部に現はれた眼の各部の名稱を記憶して置かなければならぬ。



溝、下眼瞼溝、眼瞼頰溝、睫等の名稱が附されて居る。又眼球を横から見ると虹彩膜の邊が凸出して居る。之れは角膜と稱する透明の膜が虹彩膜の外を掩ふて居るのである。次に眼の内部の組織を見るに、之れを縦断すると第百二十三圖の如き形をなし、先づ外部には角膜があつて、虹彩膜、瞳孔を経て水晶体、次に網膜、次に視神經がある。而して物体が眼に映する際には、殆も寫真機の構造と同じく、物像は瞳孔より入り水晶体により屈折せられ硝子体を通過して網膜に映じ、それが視神



經に傳へられる。
 眼の筋を説明するに先立ち、先づ頭部の顱頂筋を説き、次に眼輪匝筋、上眼瞼舉筋、皺眉筋に及ぶ。
 顱頂筋は頭蓋全部を被ふ扁平の二腹筋で、其の筋腹は小さく、中央は擴く薄い腱膜をなして居る。而して其の前方にある筋を前頭筋と云ひ、後方にあるものを後頭筋と云ふ。中央の大なる腱膜は帽狀腱膜と稱せられる。此の腱膜は骨に固着して居るのではなく、少しく運動をする。
 前頭筋は鼻根前頭骨の眉上弓上眼窩眉毛の部分より起り前頭結節に至つて

帽狀腱膜に移行する。而して其の移行の際には、前頭筋は左右に分れて二となるを以て其の兩者の間に骨部を現はす。老人の額の皺が往々上方に至つて二つに分れるのを見るのは之れが爲である。前頭筋が働けば第百二十四圖に示す如く注意の相を現はし更に強ければ驚愕の相となる。

圖 四十二百第

情表の意注



後頭筋は後頭骨の上曲線より起り斜に上方に走つて帽狀腱膜に移る。

眼輪匝筋は眼裂の周圍にあり、眼瞼部と眼窩部との二部に分つ。眼瞼部は薄くして内側眼瞼靭帯の邊より起り、外眥に至り上下相合す。眼窩部は眼瞼部より少しく厚く、内側眼瞼靭帯及

び眼窩内縁の骨面より起り眼瞼部を取り巻く。眼輪匝筋の働きは眼を閉づるにある。而して眼瞼部は軽く働き、眼窩部は強く働く。

圖 五十二百第

情表の思沈



上眼瞼舉筋は視神經孔の邊に發し眼窩上壁に密接し、上眼瞼軟骨の上縁に附着する。此の筋は眼を開き、又第百二十五圖に示す如く沈黙考の相を表はす。而して眼の開閉は多く上瞼に依つて行はれ、下瞼も動くが殆んど認め難き程に動くに過ぎぬ。

上下眼瞼軟骨は眼輪匝筋の縁邊に附着し、上眼瞼軟骨は下眼瞼軟骨よりも廣濶肥厚である。此の軟骨は一名半月狀軟骨と云ひ、二重瞼は半月狀軟骨と眼輪匝筋

第百二十八圖



第百二十七圖に示す如き戀愛有情の相たる秋波は下眼瞼部の働きである。
 外耳は耳朶を除けば他は皆軟骨を以て組織され第百二十八圖に示す如き形を

第百二十六圖
 苦痛の表情



第百二十七圖
 秋波



筋束と交錯して後に中央部の皮膚に附着する。働きは眉の中央部を下方に牽き左右の眉を接近せしめる。即ち第百二十六圖に示す如き苦痛の相を表はす。

この境に現はれるのである。
 次に皺眉筋は鼻根の邊骨面より起り斜に外上方に走り眼輪匝筋及び前頭筋の

第百二十九圖



なし其の各部には耳輪、耳輪棘、耳輪尾、耳輪溝、耳丘、耳殼窩、耳珠、對耳珠、又は迎珠及び耳朶等の名稱が附され、而して音響を内に傳達するのは外聽道である。

元來耳の形程人に依つて異なるものはないのである。耳は古來豊富圓滿なるを貴び、之れを智者福者の相となし、之れに反するものを貧弱者の相とした。又人によつて耳朶、耳輪を欠くものがあり、或は耳輪の折り返りたる如きあり、又耳輪棘の外方に突出して獸類の如きがある。それ等は概ね賤弱の相としてある。

耳の筋は人には必要がない爲退歩して今は僅かに其の痕跡を有するのみである。故に説明は省く。

第百二十九圖は顔面の諸筋全部を示す。

第四章 内臓及静脈

藝術解剖學は普通は骨學及び筋學を以て終りとす。併しながら軀幹の内部に種々の臓腑が填充する限り、人体の組織構造を眞に了解する上に、それ等に就いても位置、形狀等の概要を記憶して置く必要がある。

又血液を運行する血管の中、動脈は外部から餘り見えぬが、静脈の主なるものは外部に現はれ、又各人通じて大差なきものであるから、之れに就いても一通りの知識を持たねばならぬ。

内臓の主なるものには、左右の肺、心臓、胃、大小腸、腎臓、肝臓、膽、脾臓、脾臓等がある。

肺は空氣を呼吸し、血液を新鮮ならしむる左右一對の臓器で、心臓を狭んで其の兩側に位する。心臓と共に胸腔を填充し、下は横膈膜に接する。肺が空氣を呼吸するに従つて胸廓は縮張し、其の張るや肋骨を上舉し、胸圍を大ならしめる。横膈膜は胸腹の境をなせる椀形の筋肉板である。

心臓は胸腔の中よ、稍左側に位し、大き及び形は人の拳に相當する。血管系統の中樞で、其の兩室兩房交互の縮張により、血液を身体各部の器官に逐送する。

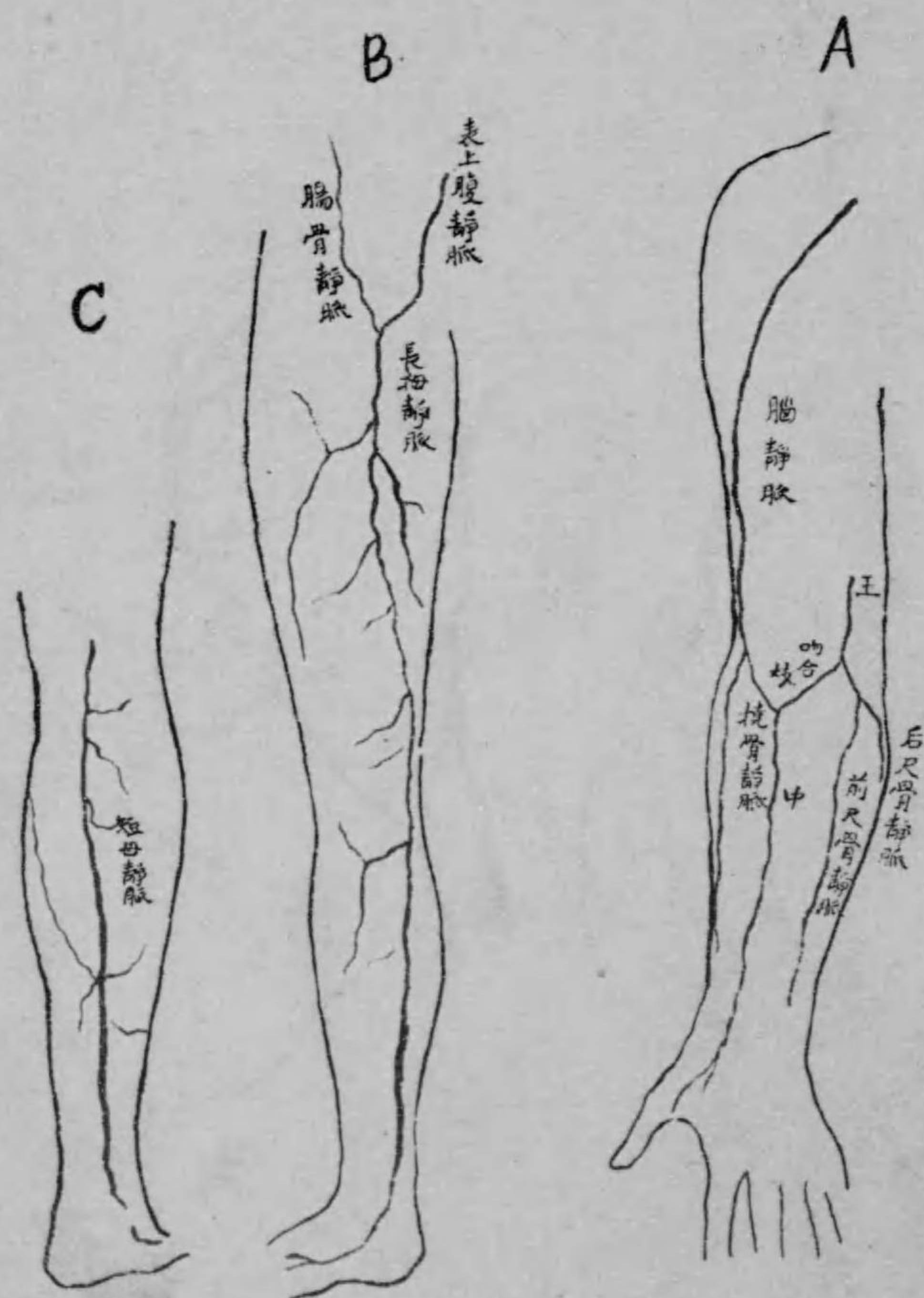
心臓より強く押し出される血液は、動脈管に入り、漸次樹枝狀に分岐せる毛細管網を経て、全体の諸器に配達され、次で同様の狀態で逆行して、静脈管より心臓に戻つて来る。而して動脈は大抵深き處にありて、骨に添ひ、筋肉に掩はれるが、静脈は之れに反し、殊に頭部、四肢に於ては淺在して、往々皮膚面にあり、盛り上つてゐて觸目することが出来る。其の細部は各人多少の差異はあるが、大系は略同一のものである。此處に掲げた圖は其の概畧を示したものであるが、奈良、鎌倉等の古彫刻の研究に益するところがあらう。静脈は女よりも男に、若きよりも老ひたるに、肥滿せるものより瘦せたるものに於て著しく外觀に現はれる。

第三百十圖は頭部の静脈を示す。

第三百十一圖は四肢の静脈を示し、其のAは上肢、BとCとは下肢である。

次に胃は食道の移行擴張せるものと見做すべく、横膈膜の直下に横はれる囊で、レトルト状をなし、食道に續ける部を賁門といひ、腸につゞける部を幽門といふ。

第一百三十圖



第一百三十圖



胃の内面は縦の襞を有する粘膜で、胃液の分泌によりて食物を消化する。幽門からは十二指腸に移り、それより長さ凡そ七乃至八メートルを有する小腸に移り、紆曲施轉、右腸骨窩に至つて盲腸に移行する。盲腸よりは上行結腸となりて上行し、肝臓下縁に至つて横行結腸となり、左行して脾臓の前面に至り、其處から下行して下行結腸となり、終にシグマ状彎曲に移行し、小骨盤に進入して直腸となり、肛門にて終る。盲腸以下直腸に至るまでを大腸と云ふ。

次に肝臓は巨大なる腺にて、右季肋部胃の右上部側を充填し、尙ほ延て左季肋部に及ぶ。其の分泌液膽汁を十二指腸中に灌流せしめ、且つ之れを集積する固有の膽嚢を具へる。膽汁は脂肪を消化し、兼て糜粥の腐敗を防ぐ。

脾臓は其の形咖啡豆に類似し、横腔膜と胃底とに倚る。腎臓は後腹壁の上部に於て左右一對脊椎の兩側に位する。其の實質頗る硬固である。其の一端は漏斗狀に開口して輸尿管となり、下膀胱に通ずる。

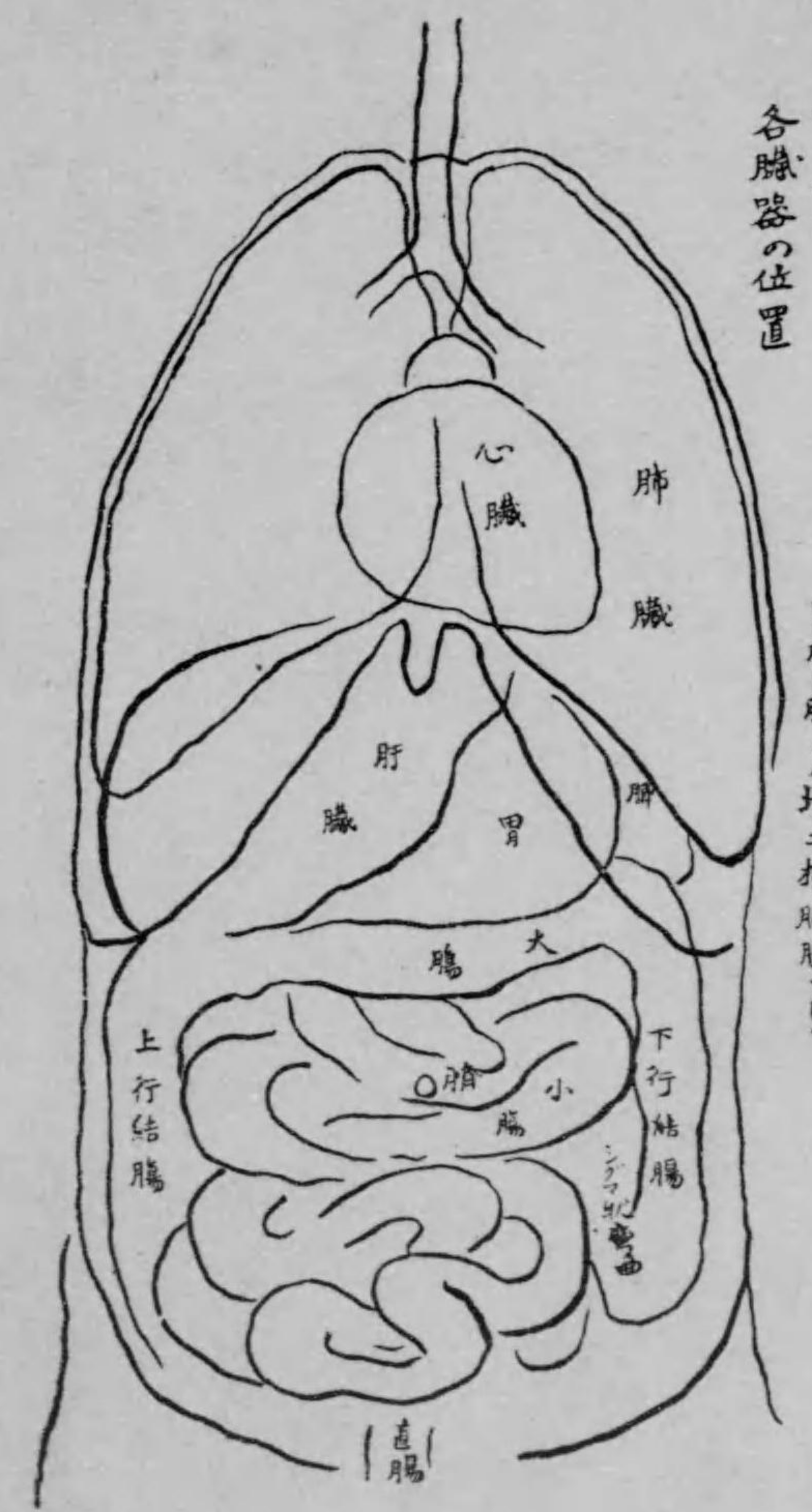
膀胱は扁平長延形をなし、胃の後方に於て横形に伸展し、固く後腹壁に附着する。十二指腸の下行部より脾臓の部位に至る右端は大きくして之れを頭と稱し、左端

第百三十二圖

各臓器の位置



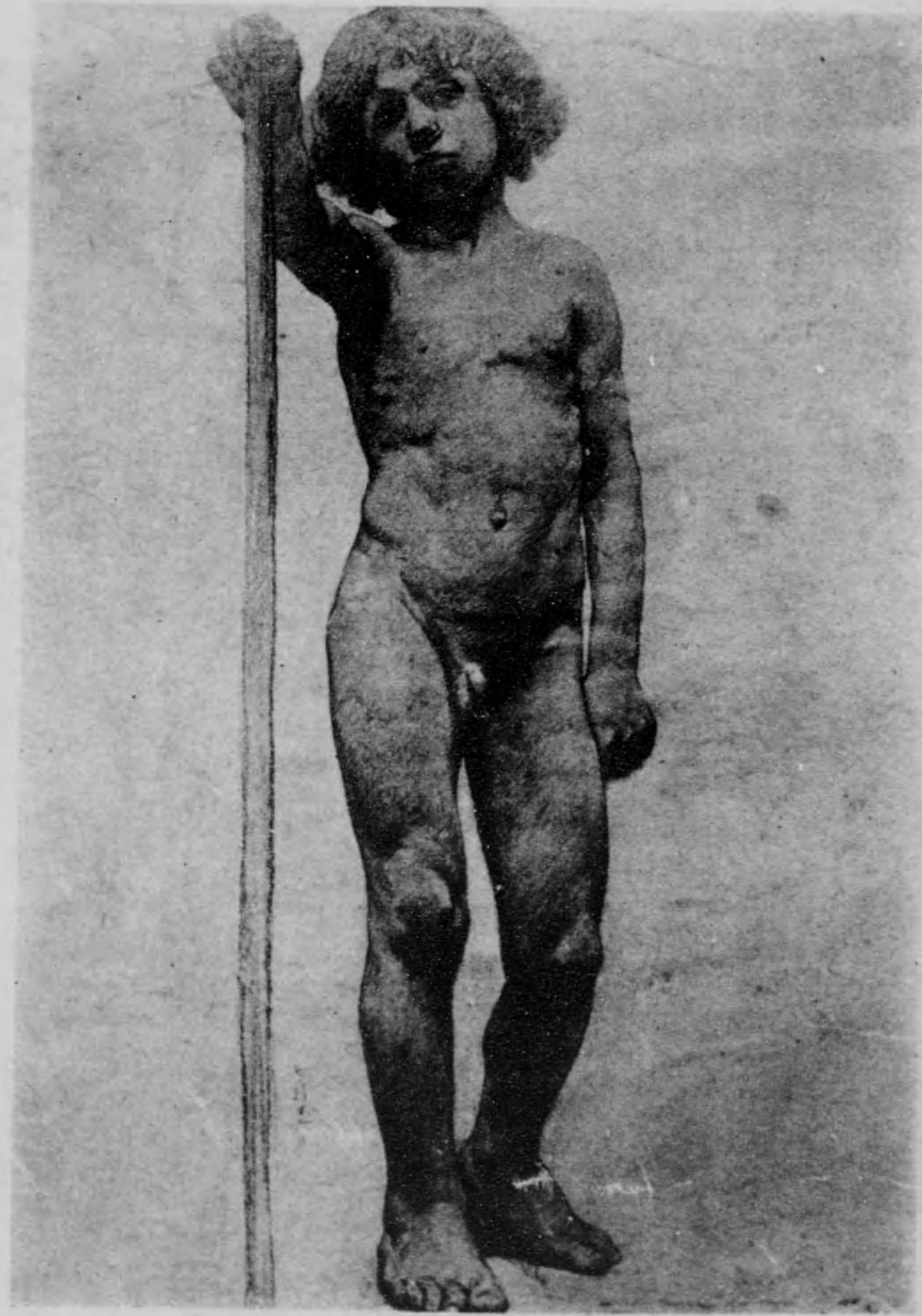
第百三十三圖
各臓器の位置



は小さくして尾と稱す。膵臓は無色透明の膵液を分泌する。此の液は澱粉を砂糖に化する力強く又胃液胆汁の如き効力を備へる。
 第百三十二圖は内臓諸器を特に解り易く示したものである。
 第百三十三圖は正面から見た内臓諸器の位置を示す。

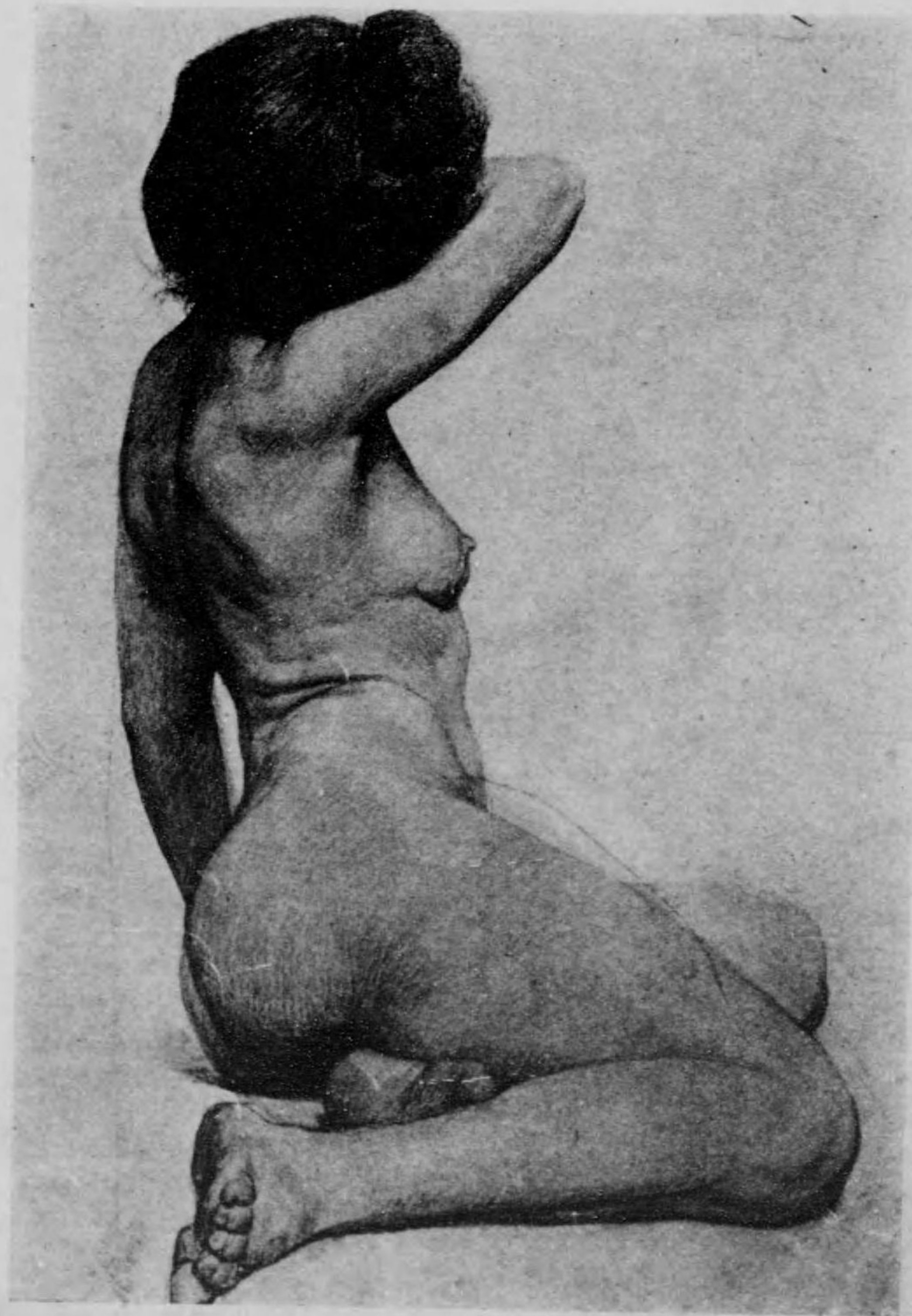
附
録

デ
ッ
サ
ン



筆折不村中 ヲサツテ

Handwritten text, possibly a name or number, written in a cursive script.

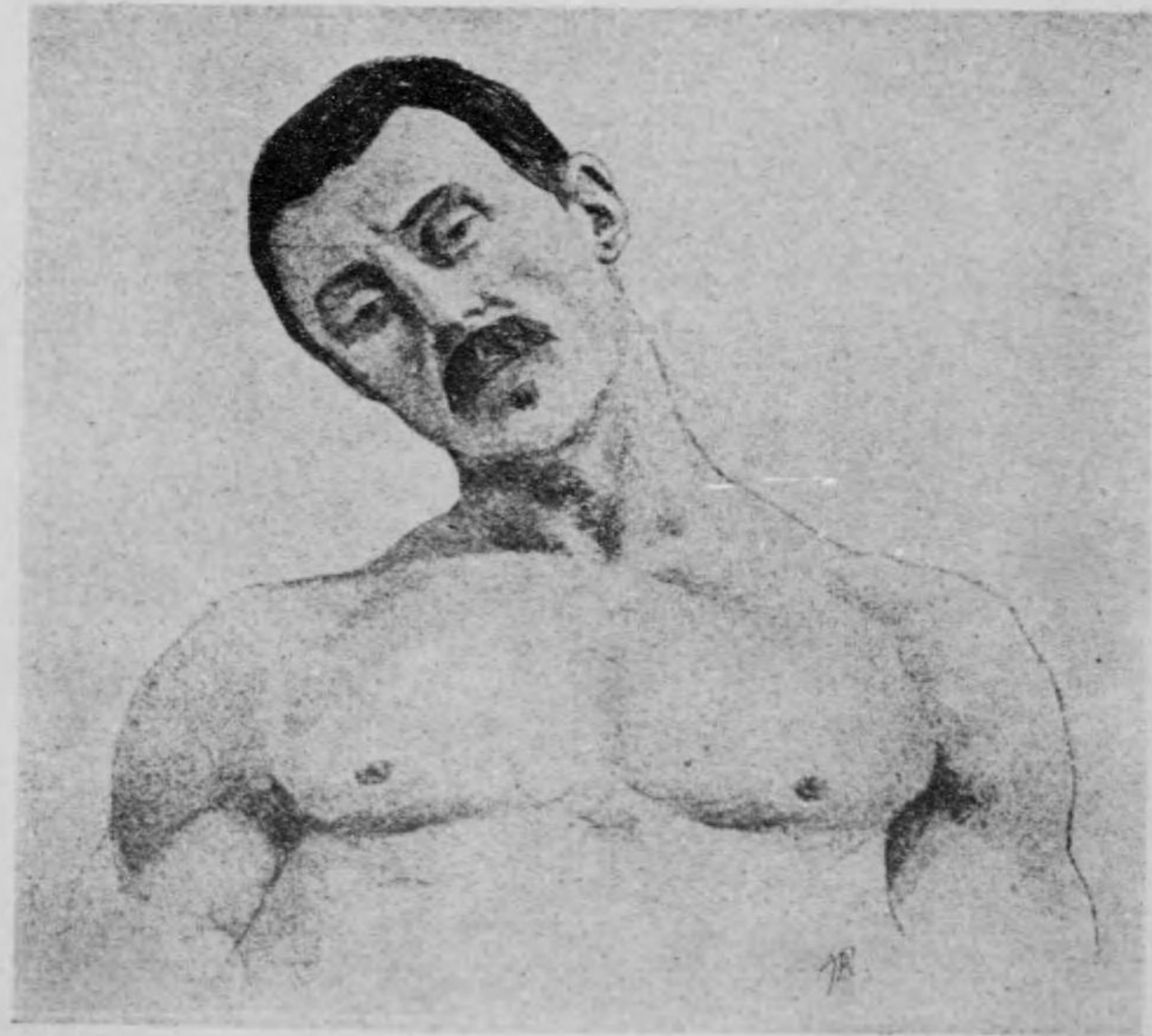


筆折不村中 ンサツデ

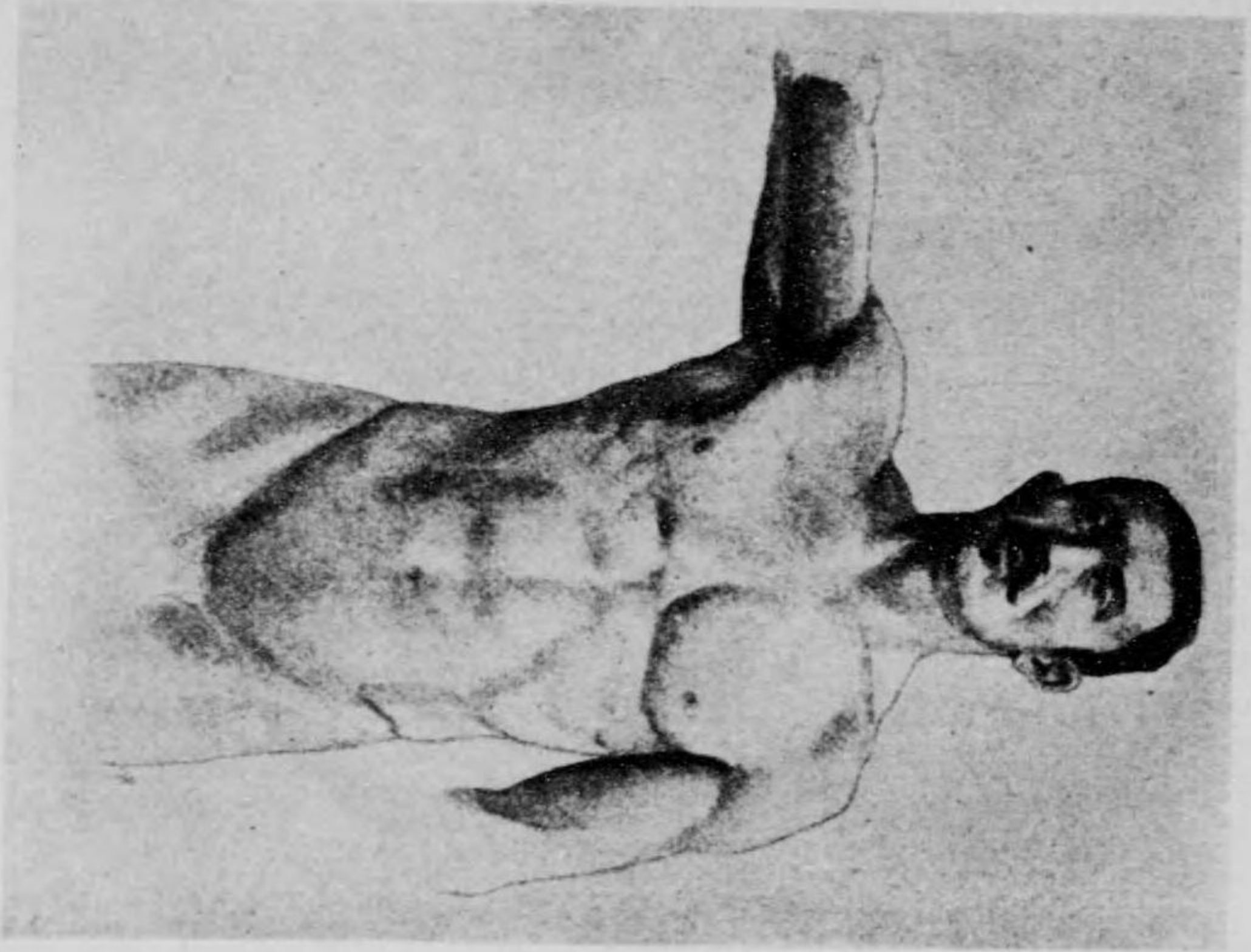


胸鎖乳嚙筋
僧帽筋

胸鎖乳嚙筋
肩胛舌骨筋
胸骨舌骨筋
僧帽筋



ノサツテと圖明説の部頸

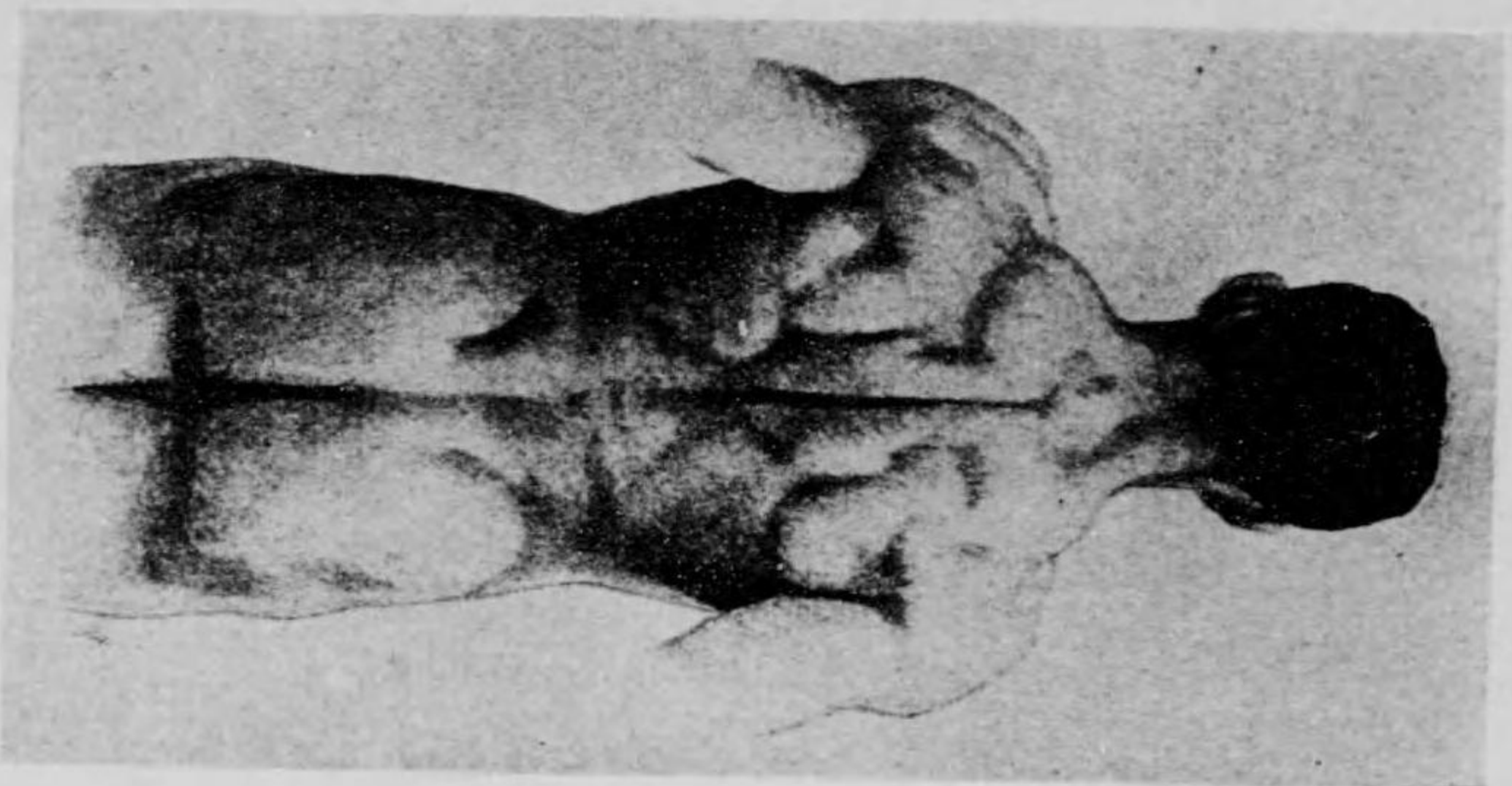


(前正) ソサツテと圖明、我の体上

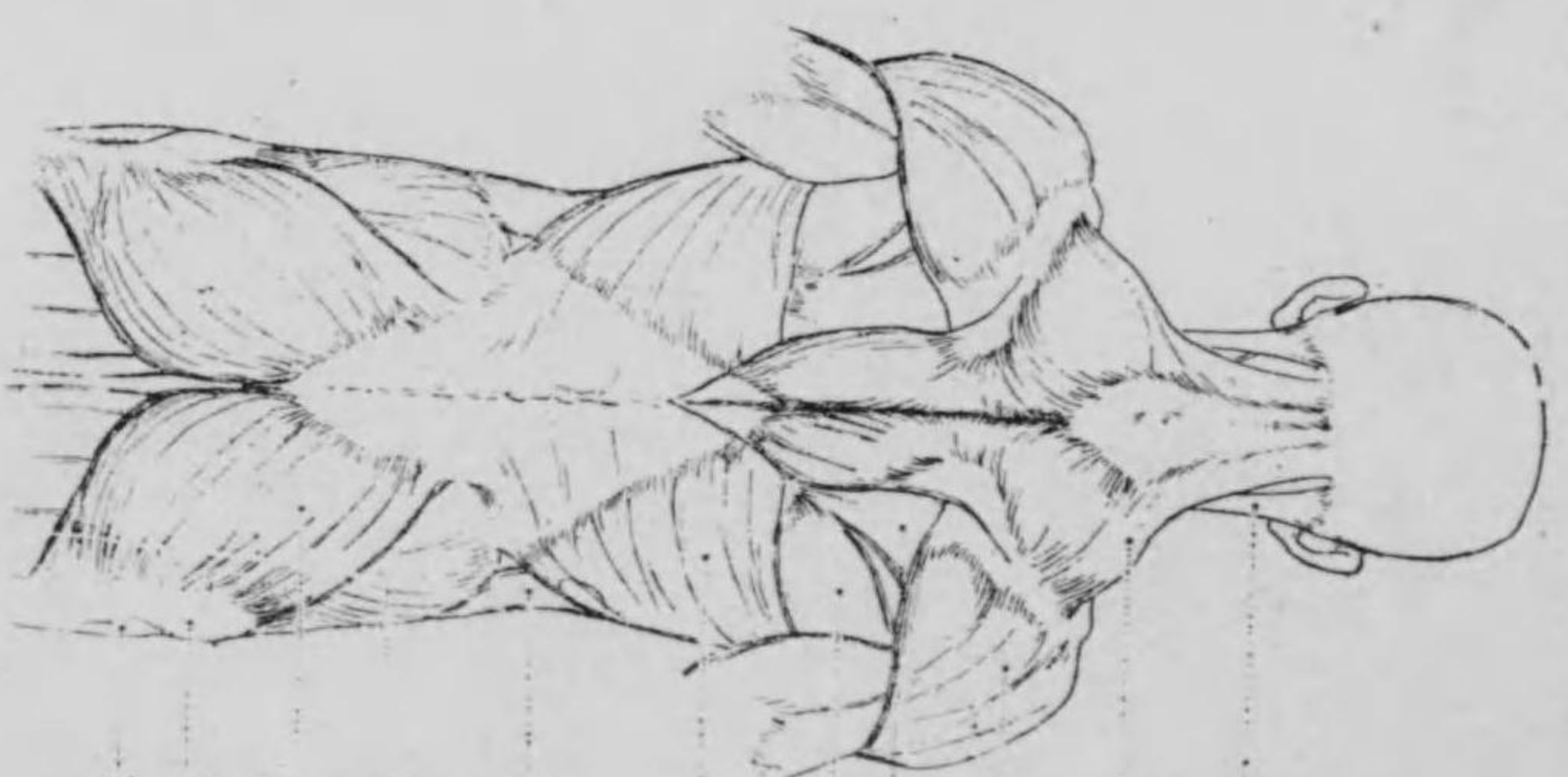


筋膊喙鳥
筋喙頭二
筋喙頭三

三角筋
大胸筋
大圓背筋
大圓腹筋
中脛筋
股刺熱筋
腿正筋
直肢筋

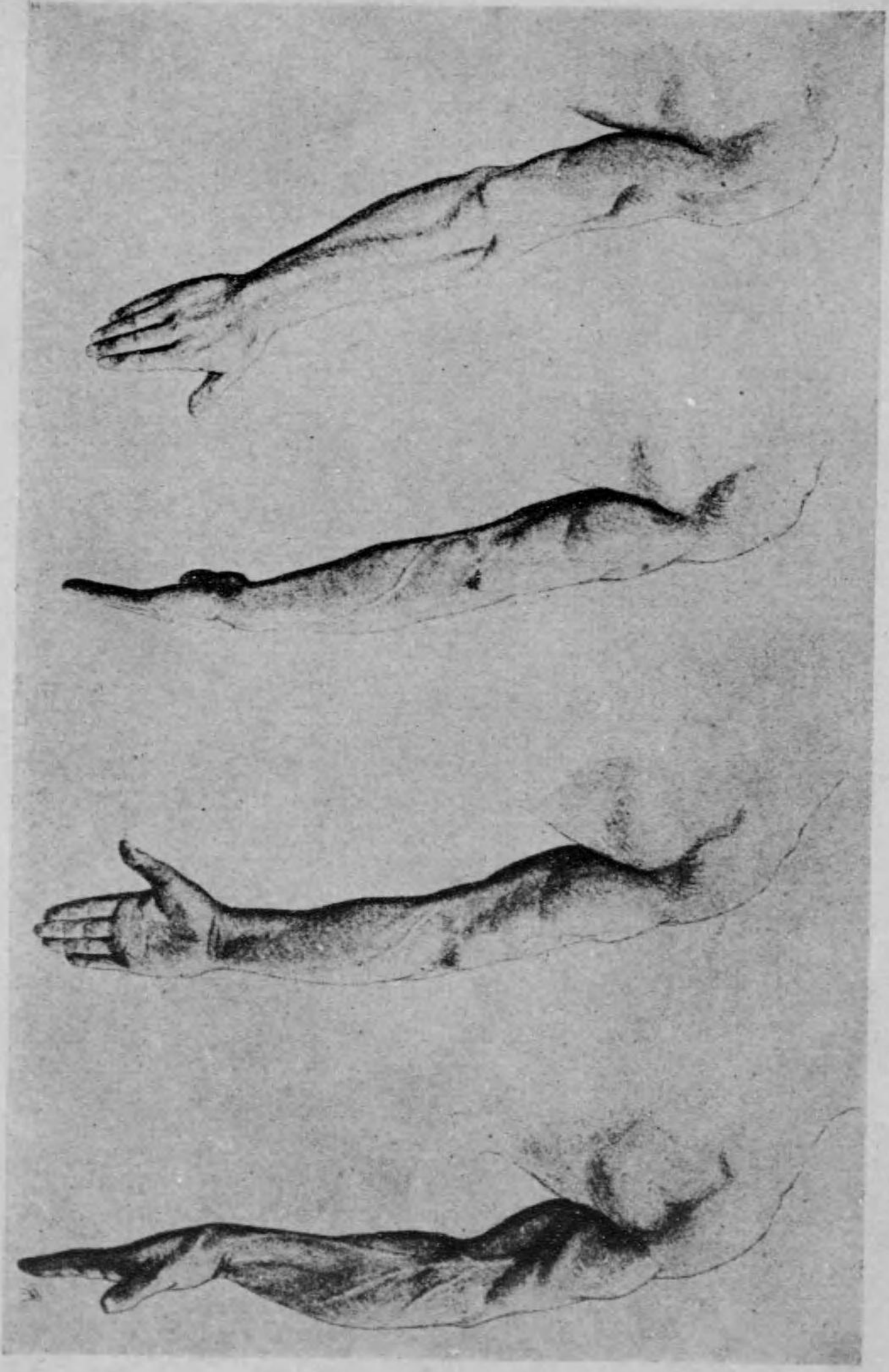


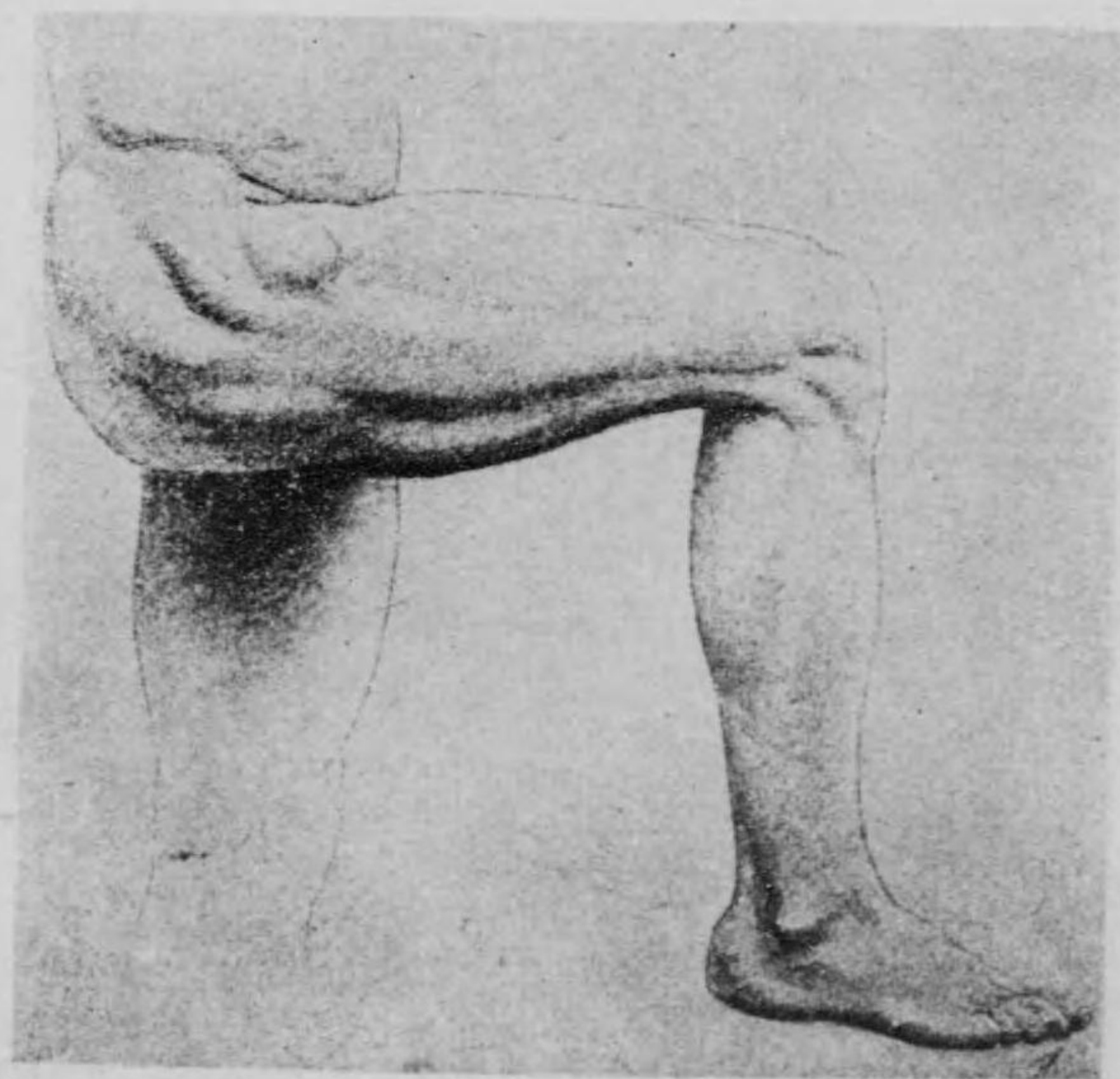
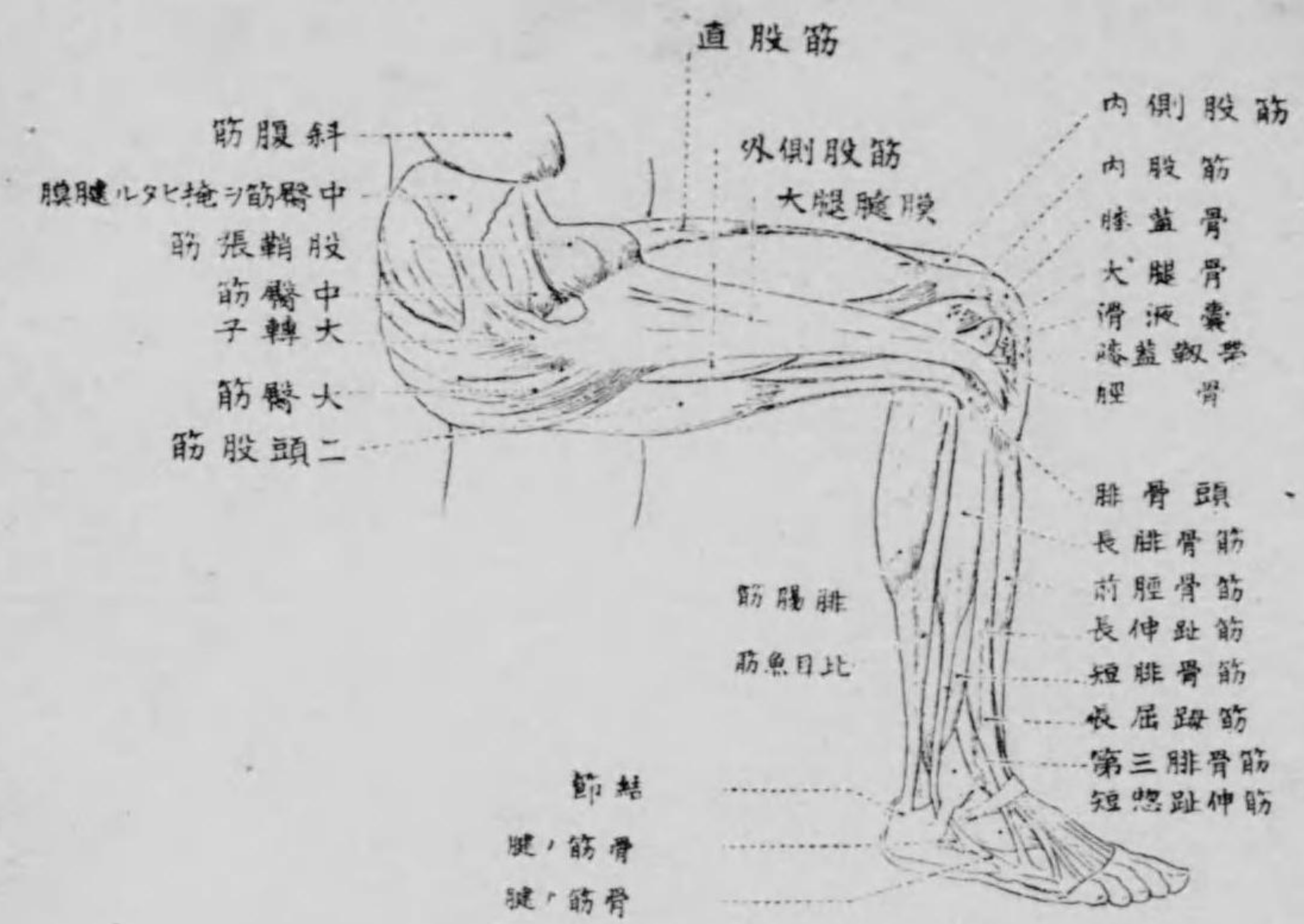
(面背) レサツヂニ圖明説の体上



- 胸鎖乳嚙筋
- 僧帽筋
- 三角筋
- 棘下筋
- 大潤背筋
- 斜腹筋
- 中大臀筋
- 大腓子膜

レサツテの肢上





ンサツデと圖明説の肢下

大正四年三月十一日印刷
大正四年三月十二日發行

不許
複製

發行所

藝術解剖學
定價金參圓

著者 中村不折

發行者 東京市赤坂區溜池町三十三番地 田口鏡次郎

印刷者 東京市芝區榮町十五番地 一噌定次郎

印刷所 東京市芝區榮町十五番地 日本美術學院印刷部

東京市赤坂區溜池町三十三番地

日本美術學院

電話新橋一八七九番
振替東京五八八六番

美術界の燈明臺

工學博士 伊東忠太 校
文學博士 黑板勝美 校
東京美術學校教授 久米桂一郎 閱

石井柏亭 共
文學士 黑田鵬心 編
東京美術學校教授 結城素明 編

美術辭典

中版天金背革箱入
六號二段組九百五
十頁插畫八百種
定價金四圓
一萬部限金參圓貳
拾錢 送料拾貳錢

繪畫、彫刻、建築、圖案、工藝等の總てを網羅す。

- 繪畫彫刻建築等古今東西の著名なる傑作を精巧なる彫版に附して掲ぐ。
- 美術及美術工藝の總ゆる術語を精細且つ正確に解説して遺漏なし。
- 東西美術家人名辭書として正確無比就中近代の美術家を力説せり。
- 現代の美術及び美術工藝上の新術語には確固不動の定義を附せり。
- 美術上の辭典として世界に何れの國に於ても此書に優るもの斷じてなし。唯此一書あるのみ。

東京市赤坂區 日本美術學院 電話新橋一七八九番
東京市赤坂區 日本美術學院 電話新橋一七八九番

小杉未醒先生著 第三版

畫筆の跡

菊版箱入美裝、紙數約三百頁
油繪 水彩 原色版 及び
寫真 三十面入
定價壹圓九十五錢、送料拾貳錢
但し支那滿洲朝鮮臺灣は廿錢増しの事

批評

東京朝日新聞曰 著者が歐洲漫遊の記念にして旅中の漫筆、其の文其の畫と相並びて頗る興趣の饒なるを見る、「歐洲航路にて」「巴里にて」「フランスの田舎」「ロンドン及ブラッセル」「スペインの旅」「イタリアの旅」「獨逸及露西亞」「歸途」の諸篇より成り終りに「記念評論」と題し其の見たる繪畫につき八十餘家に對して加へたる簡潔なる評論を掲げたり

讀賣新聞曰 (前畧)世界の風光人情を知らんと欲するものは集中の記行文を讀み、風俗習慣を知らんと欲するものはスケッチを見、而して氏が歐米漫遊によりて得たる美術上の新傾向を知らんと欲する者はその三色版の挿畫によつて豫想外の満足を得る事であらう

東京市赤坂區 日本美術學院 電話新橋一七八九番
東京市赤坂區 日本美術學院 電話新橋一七八九番

寫生の旅 ■ 書窓の下

石川欽一郎先生著 — 再版出來 —

寫生新說

菊版二百頁箱入
佛國式美裝本
水彩著彩畫五面入
定價金壹圓參拾錢
送料八錢
支那臺灣朝鮮滿洲十五錢増の事

▽挿畫——朱塗の橋——暮れ方——老樹——薄曇——屋鳥——

世に寫生に關する書多し、然れども概ね其方法を説けるものにして之を學理的に説述せるもの未だ一も之れあらず。畫術研究に於て造詣深き石川先生の此新著は寫生に關する有ゆる事項を實際と學理との兩面より説き、讀者をして其原則に通曉せしむ。就中色彩の變化配合を詳述せる處、まさに畫壇の珍寶と云ふべし。その洋畫を學ぶもの日本畫を研究するもの眞に生命ある畫を描かん事を望み、眞實の鑑賞眼を養はんとせば必ず此書を併せ讀まざるべからず。

東京市赤坂區三丁目三番
日本美術學院 電話新橋一七八九番
東京市東區八番六番

鏑木清方先生近業の逸品

清方美人畫譜

十二枚箱入 壺紙寸法 壺八寸
五分横六寸 箱入價一圓二十
錢 送料八錢 木版數十度 刷五
枚 原色版七枚
詳細なる解説書を添ふ

美人を活寫して可憐濃艶、其表情其姿態の自然なる、其描法の秀拔なる今代清方先生の右に出づるものなし、徳川時代より明治の中期にわたれる浮世繪は既に過去のものととなり、今や現代の風俗畫として萬世に傳ふべき藝術となれり、而して此風俗畫は實に先生に於て大成せられたる觀あり、本院茲に先生が最も得意とする傑作十二種を複製して世に出す、木版刷は斯道の名工西村が技術の極粹を盡し原色版は日能製版所が新輸入の器械を用ひて印刷せるもの、共に肉筆と異なる處なし、畫道修業者は絶好の手本となすべく、愛畫者は額面に仕立て或ひは壁間に掲げて鑑賞せられよ。

東京市赤坂區三丁目三番
日本美術學院 電話新橋一七八九番
東京市東區八番六番

▼水彩研究の一大寶典▲
石井柏亭先生著 (第三版出來)

我が水彩

著彩書、水彩書寫真版二十四面
スケッチ凸版十六種、箱入美裝
價一圓八十五錢 送料八錢

但し支那滿洲朝鮮臺灣は廿錢増しの事

東京朝日新聞曰 新らしき頭腦と新らしき腕とを以て我が洋書界に卓然頭角を現はし來れるものは石井柏亭なり此書は柏亭の力量を見るべきものにして水彩書を學ばんとする者を啓發せんとしたるものなり水彩畫の起原に筆を起し「スケッチ」「構圖」「色彩」「静物畫」「風景寫生」「海の畫」「人物畫」「屋内の畫」「戸外の人物」等の諸題目に一一著者得意の作物を挿入して説明と感想とを加へ其畫面の光彩あるのみならず其文章の流麗なる畫界稀に見るの才筆なり。

美術週報曰 從來此種の書物は初學者の手ほどき位に過ぎなかつたが石井氏の著書は作家と論客との藝術論とも云ふべく初學者にも専門家の間にも興味ある讀物である二十四葉の挿入畫一々深切なる選擇が加はつて實に個人展覽會を見るやうである、其色彩版の如き頗る精巧を極めたもので製版印刷に意を用ひた事察するに餘りある。

批 評

東京市赤坂區三十三番
日本美術學院電話新橋一七八九番
溜池町三十三番

丸山晚霞先生著 再版出來

水彩新天地

▲菊版背クロス箱入美本
▲着彩畫九面水彩寫真版十八
鉛筆スケッチ凸版等廿五種
▲價壹圓八拾五錢 送料八錢

但し支那滿洲朝鮮臺灣は廿錢増しの事

國民新聞曰 著者の名は水彩畫といふ名と共にすぐ吾々の頭腦に浮んで來る親しい名前である即ち一家を成した有名な水彩畫家である事は言ふを要しないのである著者は緒言に於て新といふ文字に就て「自己の經驗と所信とを人に傳へる其仕事を我のみが新らしい仕事といふ意味である」と云つてゐるが其經驗と所信とを十分に發揮して水彩畫を學ぶ人の爲に親切に説き且つ論じて啓發する所少からざる者である二十有餘の彩色した挿畫は皆著者の筆になつた立派なもの

萬朝報曰 (前略)繪畫の意義水彩畫の用途より始めて印象畫と理相派、人体と風景、自然の感化色、都會の畫材等について著者獨得の畫論を行ふ、一家言として繪を好む者を益するに足らん(後畧)

大阪朝日曰 (前略)頗る行届きたる注意と一家の見識とを包括して在來同種の著書とは少しく其類を畧にしたり(後畧)

批 評

東京市赤坂區三十三番
日本美術學院電話新橋一七八九番
溜池町三十三番

録究研術美の一唯洋東

▽獨修一ヶ年にて全科卒業△

正則洋畫講義錄

講師は東京美術學校教授文展審査員廿三名、每號本文百二十頁以上百五十頁
 作例手本説明畫廿餘種(見本規則請求者は洋畫規則入用と明記して御申込あれ)

講 師 岡田三郎助 藤島武二 石川寅治 丸山晚菫 高村真夫
 中村不折 板倉賛治 石井 欽一郎 中川八郎
 河合新藏 渡部審也 中澤弘光 吉田小杉 未醒博

△獨修六ヶ月にて畫道の奥儀に通ず▽

新日本畫講義

初めより秘法を公開して極めて初心者にも容易に奥儀を知らしむ
 (見本請求者は日本畫規則入用と明記あれ、双方を求むる人は往復葉書にて申込あれ)

問 題 横山大觀 東京美術學校教授 結城素明 鈴木清方 安田秋嶺
 竹内栖鳳 東京美術學校委員 川合玉堂 今村紫紅 岡田多門
 寺崎廣業 師 講 文展審査委員 小堀納音 尾竹竹坡 山内多門

月謝一ヶ月五十錢
 三ヶ月一圓四十五錢
 六ヶ月二圓八十錢

月謝一ヶ月五十錢
 三ヶ月一圓四十五錢
 六ヶ月二圓八十錢
 一ヶ年五圓五十錢

東京市赤坂區本美術學院電話新橋一七八九番
 沼池町三十三番

356
168

終